

---

# 変身する猫ヒーローだけど異世界來た

ガイアが俺輝けと囁いてる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変身する猫ヒーローだけビ異世界来た

### 【NZコード】

N8149Y

### 【作者名】

ガイアが俺輝けと囁いてる

### 【あらすじ】

2011年。動物愛護団体P-Aから資金提供を受けた猫野目博士は研究の結果、ついに動物に人並みの知性を持たせることに成功した！知性を得て、当初は人に従つていた彼らだが、突如、虎毛の知性ネコであるブラックタイガーが人間社会の転覆を掲げて蜂起する。人類に対して融和的である犬族・鳥族は彼らの前に駆逐され、人類の運命はネコ族の良心であるライオンのマクシミリアン先生に託された！そして、人類に隠れた数々の激戦の結果、命を落としたマクシミリアン先生の意思を継いだ白いアメシヨ『小床木バン』は

捕えられた猫野目博士を救うべく、ブラックタイガーの秘密基地に突入。激闘の末についにブラックタイガーを打倒した！そして、追い詰めたブラックタイガーは猫野目博士を使い、最後の悪だくみを実行に移そうとする……そして一同が会した時、サボってネトゲをやっていたブラックタイガーの研究員のせいで全員が異次元に飛んだのだ！！！

俺の名は小床木バン！！！！

「おのれ… 小床木バン（おとこぎばん） まさかこれ程の力を秘め  
ていようとは…」

「ここまでだ！ ブラックタイガー！ 猫野目博士を解放し、降伏し  
て罪を償え！」

断続的に灯る赤いランプと警報を鳴らしながら、崩壊し続けるブ  
ラックタイガーの秘密基地の中。俺は纏わりつく黒服の戦闘キヤッ  
トを前足のパンチで蹴散らしつつ、奥に倒れる黒い虎毛に歩みを進  
める。

「認めん… 認めんぞ… たかがイエヌコの化身である貴様が虎の力  
を持つ俺を倒すなど…」

「貴様を倒したのは俺だけの力ではない…」

「何だとおお…」

「俺の中には、貴様に利用され、使い捨てにされた6将軍の力と  
魂、そして親友であつた片田の吉宗。さらには、貴様と俺の師でも  
あつたマクシミリアン先生の魂が宿つてているのだ！」

「くつ… 裏切り者に死にぞこないの古いぼれの力だと」

「そのバカにした古いぼれの力を受けるがいい！ 変身ツ マクシミ  
リアン！！」

パンテエラ・チェンジ！ mode… レオ！！！

俺の首輪から流れる清らかな女性の声と共に、俺の体を一瞬で緑色の光が包み込み、辺りを眩しく照らす。そして光が引いた後、そこに居たのはがっしりとした体格に豊かなタテガミを持つ雄雄しきライオンの姿だった！

「くそつ、他猫の手を借りる、猫かぶり野郎め！」

「なんどでも書つがいい、食らえ、キングスブロー！」

唸りを上げて黒虎を張り飛ばす俺の右前足。

右頬に先生から授かつたレオ・パンチを食らつた黒虎は、哀れ勢いよく吹つ飛ぶと、『ズガン』と壁を砕き、隣の部屋にまで飛んで行つた。

「これは・・・猫野田博士！..」

黒虎が突つ込むことで開いた穴の先には、頭にコードが付いたヘルメットを被らされた猫野田博士がベットに横になつており、そのコードをにつないだパソコンの前で研究猫が一心不乱にマウスを操りながらキーボードを叩いていた。

「まだか...まだ解析できんのか...」

「ちよつと待つニヤン~今、ヒリアボスと戦つてるとこニヤン

~」

催促する黒虎に叫び返す白衣の研究猫。

ヒリアボスだと...ここからは猫野田博士の脳からいつたい何を...

そう俺が思つたその時。

「やつたニヤン—レアモンスター討伐成功ニヤン—」

その言葉と共に、壁一面に張られていたディスプレイがもやもやと霞がかつた様に不鮮明になり、強烈な光と共に、俺や黒虎、猫野目博士を含む数十ネコと一人は薄汚れた石造りの部屋にいた。

なんだか…ずいぶんと長い時間寝ていたような気分だった。

その間に、何匹ものネコが俺のそばから離れて行った気がした。いつの間にか俺の変身は解かれており、なぜか黒虎も体の傷が癒えていくようだ。

「貴様!今まで一体、何をやつておつたのだ!?!」

俺のそばでは黒虎が白衣の研究ネコの襟首を掴み、吊り上げながら怒声を上げている。

「ゲームにゃん!—ずっとやりたかったニヤン!—今まで休みなしで働かされたんだから、文句言つたニヤン!—」

白衣の研究ネコはそう言つと、後ろ足で黒虎の腹を蹴りあげる。そして予想外の反撃に手を緩めた黒虎の隙を付いて、石の床を走り抜けて部屋を出て行つた。

「万策尽きたな…ブリックタイガー…覚悟しろ。変身ツマクシミリアン…！」

俺は両前足を交差せると、黒虎に正義の鉄槌を下すべく再びツイオンの姿に…

…あれ？変化しないぞ？

「変身ツマクシミリアン…！」

「…………マクシミリアン…！」

「マクシミリアンに変身つ…！」

「じゃあ吉宗でもいい…！」

「オイツ…反応しろ……！」

首輪をペしペし叩きながら変身を促す俺。

しかし、首輪は何の反応も返さずに鈍く銀色の光を放つのみである。

「ほり…じりじり被つたネコが剥げたようだな…！」

俺の変身が上手くいかないのを見て、威勢を取り戻す黒虎。

「くつ…舐めるなよ…他猫の手を借りずとも」の『小床木バン』！悪を成敗して正義を知らしめてくれるわ…！」

変身を諦め、後ろ足だけで立ち、師匠直伝の拳法の構えを取る俺。

「ふつ…黒でも白でもネズミを捕るのが良い猫だとこつねゼリフをその身に教えてやるつ…！」

そう言つて、黒虎の体は巨大な虎の姿に変化する。  
そして互いに突つ込む2匹。

黒い獣と白い獣、二つの体は交差し、数十秒の後に辺りは静寂に包まれた…

## 俺の名は小床木バン！――（後書き）

さつきNHKの嵐の番組ででた、被災地の「当地ヒーローショー」見てたら  
変なインスペイア来た。

その結果がこれ。

「これがプロローグだア！！！」

「あつルネ、猫が目を覚ましたわ。」

俺が長い眠りから気が付いた時、目の前にいた小柄な白髪のツイントールをした女は、そういうながら俺の前から離れていった。

「！」

そう咳きながら起き上がる俺。痛みに顔を顰めて自分の体を見渡すと、白慢の白地を基調としたアメシヨ特有の艶やかな毛皮は包帯で包まれており、至る所に赤い血が滲んでいた。

「そりか…俺は負けたのか…」

思い出すのは、石で囲まれた部屋で対峙した、兄弟子である黒い虎毛。

奴は俺が繰り出した獅子山拳とまつたく同じ技を虎の姿で使い、俺を打ちのめしたのだ。

おそらく、あの後瀕死になつた俺を放置し、猫野田博士を連れて、黒虎は去つたのだろう。

そう思つと力が抜け、その場に倒れ込む様に横になる俺。

しばらくすると、白髪ツインテールと入れ替わる様に腰までうねる黒髪の大女がやってきて、俺の体を触つたり、あごの下に手をや

つたりなどして、怪我の調子を見はじめた。

「うあえず、タダの一般猫だと思わせるため、弱弱しへ『』やあん』とだけ一聲鳴いておくれ。

黒髪の大女はそんな俺の様子を見て、

「転送システムはまだ起動してなかつたつて言つのに、アンタた  
ちはどうやつてやつて来たんだろうね」

と呟いていた。

## 転送システム?

どうこうことだと訝しがつていると、俺の首輪に内蔵されている  
人工A.I.が神経組織を通じて俺の脳の電気パルスを活性化させ、通  
信を開始し始めた。

おはようございます、マスターおはまつ、マリー・ヌ

声に出でず、思念で返事をする俺。

わざわざなんで変身をしてくれなかつたんだよ

もう少しで、黒虎を倒すことができたのに…と不満をあらわにすると、マリーヌは興奮した様子で返事を畳みかけてきた。

そんな事よりもですね！すゞこんですよマスター！——昨日の……

つてマスターが寝てたから一昨日なんですけども。あの部屋中のデイスプレイから光を浴びた瞬間にですね！次元の違う位置から干渉を受けて、私達の魂が転送させられたんです！実際にマスターの体も再構築されたものですし！私だって随分と機能が弄られて再構築されて！

ちよつと、まつてくれ。落ち着いてくれ。よくわからないうよ

AIの癖に興奮するマリーヌを宥める俺。

そもそもマリーヌはこれほど感情表現ができるはずはなかったのだが、なぜか今までにないほど表現豊かで、頭が痛くなつてくる。

もう一とにかくこれを見てください！

マリーヌがそう言つた瞬間、俺の見ている光景の手前に緑色の情報ボードが映り、様々な情報を羅列した。

名前 小床木バン（おとこぎばん）  
イエネコ

【基本職】F・C・A・T・U・S【サブ職業】変身ヒーロー

魅力	精神	体力	腕力	イエネコ
愛情	知力	器用さ	イエネコ	イエネコ
薄めの虎柄・白アメショ	人並み	敏捷	イエネコ	イエネコ
ネコ程度	師範代	腕力	イエネコ	イエネコ
		体力	イエネコ	イエネコ
		精神	イエネコ	イエネコ
		魅力	イエネコ	イエネコ

生命 馬ぐらい  
運 ヒーロー

### スキル

【獅子山拳・師範】 L V . 17  
【魂の伝承者】 L V . 1  
【正義の心】 L V . 10  
【人語】 L V . 11

…これがどうしたんだ?  
すごいでしょう? 私、こんな状態まで表示できる機能が付いた  
んですよ!

そうか…すごいな。

何がすごいのかよくわからないが、とりあえずマリーヌを褒めて  
おく。

そのまま興奮してしゃべり続けるマリーヌの機嫌を取りつつ、わ  
かつたことは。

俺とブラックタイガー一味はあるの閃光で異世界に来たらしい。

そして俺が変身できなかつたのは、異世界に来た時に6将軍と親  
友・師匠の魂が弾き飛ばされてバラバラになつたから。

彼らを再び、見つけ出せば何とかなるんじやないですか。

それよりも、猫野田博士に私を見てもらいたいから、とつとヒグ  
ラックタイガーたちを倒しちゃいましょう。

マリーの言つた事を要約すると以上である。

俺もブラックタイガーを倒すことに関しては、異論がない。

しかし、俺の力である変身能力が失われた状態では勝てないだろう。

しかし、いつか滅ぼしてやるぞ、ブラックタイガー。

俺は傷だらけの体を柔らかいクッションに沈めると、英気を養うべく、段ボールの中で静かな眠りについた。

これがプロローグだア！――（後書き）

多分、引き伸ばしても全10話くらいで終わると想つ

## 対決！跳猫拳！－！（前書き）

自分で書いた奴読み直してどうかで似たような設定見たなって思つた。  
何かつて書つと

後書き

## 対決！跳猫拳！――

女たちに半端を受けた俺は三日ほど経つと、傷もだいぶ癒え歩けるようになったので、隙を見て館を飛び出し、中世ヨーロッパのような街並みをトコトコと歩いていた。

「あれから四日…ブラックタイガーめどりに消えたのだ？」

そうやって黒虎一味を求め、街中を探す俺の姿はさすがに目立つのか。

俺を見て『ネコちゃんだ』と叫びながら子供たちが寄ってくると、頭を撫でては気持ちよさそうに笑つて行つたりする。

どうやら異世界でも俺の姿を見て人は笑ってくれるらしい。

人を癒すために存在すると言つても過言ではないイエネコ冥利に尽きるひと時だ。

俺もついい嬉しくて「ゴロゴロ」と無意識的に喉を鳴らしてやると、エサの最速とでも思ったのか、少女が家から干し肉を持って来て、その場で裂いて俺に食べさせてくれた。

地球のキヤツトフードとは違つ無味乾燥な味わいだが、指先に水仕事のあかぎれをもつ少女の姿を見る限り、それでも大切な食糧ではないのだろうか。そう思つと、ありがたさが骨身にしみる。

俺の食べる姿を嬉しそうに見つめて『ネコちゃんまたね』といつ

て途中だつた水汲みに去つて行つた少女。

その姿をほほえましく眺めていた俺だが、ふと気づくと、少女が出てきた家に黒い服を着た見慣れた影が多数侵入していくのが見えた。

まさかと思い、少女の家の窓（木の戸板をつかえ棒で開け閉めするタイプ）によじ登る俺。果たして中では、ブラックタイガーの戦闘猫が台所の食材を持ってきた袋に詰め込むところだつた！！

あのよつな少女があかぎれを作るほど働かなければいけないほど  
の赤貧の家庭だといつのに、そここの家から盗みをするとは許せん！

「変身！獅子拳ジヤーーー！」

フェリス・チエンジ！ mode：カトウース！！！

俺の叫びと共に、  
辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、窓の上には全身を白い湯綿されたアフリミー様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

## 説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野田博士の開発した戦闘AI『マリー・ヌ』と共に

人にはかなうアラッケタイカリを倒すべく現れた正義の戦士！

マリー・ヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて  
バンを覆面ヒーローにすることができるのだーーー！

לענין י. י... ל

窓から家の中に飛び降りた俺は、行きがけの駄賃に近くの黒服戦闘猫にとび蹴りをかましながら地上に降り立つ。

」――ア――・――ア――・――ア――・」

俺の姿を発見し、警戒音を発する黒服戦闘猫たち。

数は8匹と言つたところか。

「貴様らの悪事しかと見た！人の好意を猫跨ぎにするその行為、断じて許さんぞ！」

叫びながら、近くに居た戦闘猫をネコパンチで入口まで吹っ飛ばす俺。そのまま家の外に戦闘猫を引き連れて野外戦に持ち込む。

「とつとつ！ たあつ！ 」  
「やーーー！ やーーー！

そのまま俺を取り囲む戦闘猫達だつたが、マクシミリアン先生直

伝の獅子山拳を極めた俺の敵ではなかつた。打撃を腹に貰つて蹲る者、顔面に食らつて吹つ飛ぶ者。そして腹を見せて降伏を示す者など、2分もしない内に残りは2匹にまで減つていた。

「残りは貴様らのみだ！！覚悟しろ！」

『はああっ』と【獅子山拳渦巻の構え】を取る俺。

その俺の姿に氣勢を削がれる戦闘猫達。

これは戦わずしてもよいかもしれんと俺が思つた時、立つてゐる俺に太陽の光が急に当たらなくなつた。

バン！上です！！

俺はマリーヌの声よりも早く反応していた。

バグオン！！

横つ飛びにとんだ俺が先ほどまで居た場所に突き刺さるしなやかな脚。

そして黒い耳に筋肉質の体。

「お前はエスマイル！！」

「いかにも！我は6將軍が一、『跳梁將軍エスマイル』である！」

！」

エスマイルは特徴的な黒く尖った耳を風になびかせながら、俺を睨みつける。

「久しいな、『小床木バン』！前回は『マクシミリアン』にしてやられたが、今回はそつはいかんぞ！」

「まてーお前は確かに死んだはず！なぜ生きているのだー？」

「知れたことー武人として貴様との決着を付けるために地獄から舞い戻って来たのよー』変身ツー！カラカルー！」

エスマイルの叫びと共に、茶色の光がエスマイルを包むと、エスマイルは両後ろ足にとがった黄金のかぎ爪が付き、背にはマントのような薄絹を纏った姿に変身した。

「再びわが跳猫拳で、お前を借りてきた猫のよつに動けなくしてやるわ！」

『バツ』つといづ音と共に空高く飛び上がるエスマイル。

そのまま太陽の光の中に姿が隠れ、俺からはその位置が掴めなくなる。

来ますー逃げてくださいバン！

マリーヌの指示を受け、とつたに、横に避ける俺。

しかし、避けそびれたのか、エスマイルの着地の瞬間、『ガリツ』と左わき腹あたりの衝撃アーマーがエスマイルのかぎ爪で削り取られる。

それにかまわず、とつさに反転し、エスマイルを捕まえようとしたが、近寄る前にエスマイルは再び空高く飛び上がってしまった。

くそつ。

奴の跳猫拳の恐ろしさは、極端に軽量化された装備で一撃離脱を繰り返すそのスタイルにある。通常、変身能力を持つ俺達は、その力と不釣り合いなほどの体の脆弱さをカバーする為に衝撃アーマーを全身に着ようとするのが一般的だ。

しかし、エスマイルはその流れに逆らい、あえて装備を足の力ギ爪という攻撃ポイントと空中で着地地点を変更するための背中のエアメントだけに絞っているというレアスタイルなのだ。

かつて、俺がエスマイルと戦った時、俺は奴の跳猫拳に手も足も出ず、近くの犬小屋の中に逃げ込み身動き一つ出来なかつた。そこにはやつてきたマクシミリアン先生が俺に手本を示すように【獅子山拳・山降ろしの構え】で奴の左前足を負傷させ、弱つた奴を吉宗と共に倒したのである。

そして先生は『跳猫拳の恐ろしさは太陽が天高くある時である』と言つていた。もし奴と夕方でなく、昼に戦つていたら、先生でさえ太陽に隠れるやつを止められるかは運しだいになるとも言つていた。

もつ、マクシミリアン先生はいない…

そして、あの時、俺と共に戦つていた吉宗もブラックタイガーに殺されてしまった。

「ははは、どうした『小床木バン』・マクシミリアンがおりぬと惨めなものだなあ！」

そう言いながら、跳ねては俺のアーマーを削り取り続けるエスマイル。

「また2匹でまとまつて犬小屋に逃げ込んだらどうだ？…あア、そう言えればあの片田はもう死んだのかあ！！」

俺を罵倒しながら、嬉しそうに声を弾ませるエスマイル。

『あの片田も弱かつたなあ』  
『ブラックタイガー様からお前を守つて死ぬとは無駄死にだったなあ』

などと、吉宗まで罵倒し始めた。

「無駄死にだと…ふざけるな！」

怒りに震える俺の動きが鈍る。

次の瞬間。

ズガツ…

「…相変わらず、単純な漢よ…」

エスマイルは動きが止まつた俺の背中にカギ爪を直撃させ、倒れ伏す俺を地面に押し付けるように踏みつけていた。

「」のような弱小ではブラックタイガー様に傷一つつけられんわ

…

呟くと同時に俺から離れ、地面に降り立ち、再び空高く飛び上がるエスマイル。

「次の一撃で友に会わせてやろい…」

奴は天空から天啓を授けるかのように俺に語りかける。

「吉宗には会いさ…だが黒虎を道連れにしてからだ！」

俺はボロボロでもう役に立たない衝撃アーマーを解除すると、生身で立ち上がる。

そして両前足を高く上げると両後ろ足を前後に開き、【獅子山拳・山降ろしの構え】を取る。

もし、これが失敗すれば、俺は奴のカギ爪に引き裂かれ、死ぬだろい。

だが、奴の姿は太陽に隠れて良く見えない。  
マリーヌのセンサーに頼つたとしても、反応が遅れてやられてしまつだろい。

そう思いながらも、ボロボロの体で構えを取る俺。  
タイミングを読ませないためか、いつもより滞空時間が長いエス  
マイル。

ふと、太陽の中から鈍い光が反射しているの気づいた。

その光が見えた瞬間、俺は両前足を強く握りしめた。

そして前足に係る確かに感触。

そのままつかんだモノごと地面に叩きつけるように両前足を振りぬくと、

茶色い黒耳のネコは頭から勢いよく地面に衝突し、植木鉢が割れるような音をたてて地面に張り付いた。

「『上手の猫が爪を隠す』と言つが……貴様は謙虚になれなかつたようだな！」

奴の輝くように派手な黄金の力ギ爪。

それが反射する光が太陽の中に隠れた奴の落下を俺に知らせたのだ！

「見事だ……小床木バン……」

瀕死になつたエスマイルは満足したような表情で俺を見ていた。

「我的跳猫拳を破るとは……貴様こそ眞の武人……わが跳猫拳を託すにふさわしい……」

「エスマイル……お前まさか俺に……」

「言うな……我はブラックタイガー6将軍……仲間を逃がすためなら

死など厭わんよ……」

「うう言われて周りを見渡してみると、倒れていた黒服戦闘猫達は  
とっくに逃げ去っていた。

「よいかバン……眞の良将とは戦争に勝てる将ではない……兵の犠牲  
を最も少なくて済み、目的を達成することができる者……それが良将な  
のだ……」

「エスマイル……」

彼の言葉に偽りはなかつた。

それは、たとえ捨て駒にされるのが分かつていたとしても、たつ  
た一匹で部下を逃がすために先生と俺、吉宗の三匹を相手に戦つた  
あの時の奴の行動が、最も雄弁に語つていた。

エスマイルは弱弱しく前足を俺の方に差し出す。

迷いなくその前足を握る俺。

その瞬間、エスマイルは息を引き取り、奴の魂は再び俺の中に戻  
つてきたのであった。

## 対決！跳猫拳！！！（後書き）

ティウンティウンティウン…

名前 小床木バン（おとこぎばん）

【基本職】F・CATUS【サブ職業】変身ヒーロー

腕力	イエネコ
体力	イエネコ
器用さ	イエネコ
敏捷	イエネコ
知力	人並み
精神	師範代
愛情	ネコ程度
魅力	薄めの虎柄・白アメシヨ
生命	馬ぐらい
運	ヒーロー

スキル

【獅子山拳・師範】Lv.17

【魂の伝承者】Lv.2

(C·caracal)

【正義の心】Lv.10

【人語】Lv.11



## とめろー！ 豹拳ー！

エスマイルを倒した俺は、傷だらけでフラフラと歩いていた所を再び白髪ツインテールに見つかり、館に連れ戻された。

そして傷を癒すこと2日。

ほぼ完治した俺は、空いていた窓から外に飛び出すと、再び黒虎一味を成敗すべく、町を歩き回っていた。

俺は大通りを避け、今日は、城壁をぐるりと回る事にした。なぜなら、3日前にエスマイルと大立ち回りしたせいで、何人かの人間に俺の姿を見られてしまった可能性があるためだ。

そんな俺が城壁の下を歩いていると、少年が可愛らしいヒョコを抱きかかえて、ゲージに入れている姿が見えてきた。

少年の手を抜けて走り回るひよー。

「こら、逃げ回るなよ」

怒る様にヒョコを捕まえてはゲージに入れている少年。

どうやら、この御宅は養鶏を行っているらしい。

少年の仕事は、鶏になる前のヒョコの面倒を見る事なのだ。

そう思いながら、ほのぼのとした田で少年を見ていると、少年は俺がヒョコを狙っているとでも思ったのか、『しつしつと腕を振るそぶりをして、俺を追い払おうとした。

すまん、申し訳ない

そう思い、その場を後にする俺。

少年は俺が去つて行くのを確認すると、すべてのヒヨコをゲージにいれ、家中へと入つていいく。しかし、俺を追い払つ際に口を離したせいか、一匹だけ物陰に隠れたヒヨコがゲージの外に取り残されており、少年の仕事はいまだ未終了と言つたところか。

まあ、ゲージを家中に仕舞う時や、ヒサやりの時に気付くのだろう。

頑張れ、少年。

社会に負けるなよ！

心の中でヒールを送り、クールに去ろうとした俺の横をぶわっと一陣の風が過ぎて行つた。

あれは…

と思つたのもつかの間、風は物陰に隠れるよにしていたヒヨコの元へたどり着く。

哀れな黄色い毛むくじゅらは『びきつ』といつ話を上げて、その命を終えた。

あつといつ間の間に行われた虐殺に驚く俺の目には、ヒヨコを口に咥え、その斑点だらけのしなやかな体をこすりこすりと見せつける優美な雌の姿。

「ずいぶんとじょぼ暮れているわね」

「君は…テレーズ…！」

その姿に懐かしさにも似た思いを抱き、怒るのも忘れる俺。

テレーズはそんな俺を一瞥すると、ヒョコを口に咥えたまま、踵を返して去つて行こうとした。

「待て、テレーズ！」

最速のネコ科に追いすがる俺。

テレーズは俺をチラと振り返ると

「いいのかしら…後ろの子たち…どうやら猫の手も借りたい事態のようよ

と呟くと、一陣の風のように姿を消す。

あわてて後ろを見ると、雲状の斑点におおわれた大きなネコ科に率いられた戦闘猫が大挙してヒョコの檻に押し寄せていた。

「野郎ども！やるぜ！！」

叫びながら首を一閃させる先頭のネコ科。

振られた牙は、一撃で檻を切り裂き、崩れた場所からは慌てたヒョコが逃げ出し始める。

それを逃がすまいとそれぞれが思い思いに捕まえて袋に入れていく戦闘猫達。

おのれ…未だ生まれて間もなく、自衛の手段もない人の家畜に手を出すとは許せん！！！

「変身ツー獅子拳ジャー！……」

フェリス・チエンジ！ mode… カトウース！…！

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、路上には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘A.I.『マリーヌ』と共に  
人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！  
バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて  
バンを覆面ヒーローにすることができるのだ！！！

突如として現れた光に立ちすくむ戦闘猫達。

その隙に俺は捕えられていたヒヨコたちの袋を爪で切り裂くと、  
ヒヨコたちは雲の子を散らすようにその場から逃げて行つた。

「貴様…『小床木バン』…！」

「そつしつお前は『剣王将軍トウルシギリ』…！」

俺の姿を見つけ、憎しみのこもった目で俺を見つめるトウルシギリ。

「今日は何と言つ良い日だ…あのこつくき獅子山拳の継承者である貴様を抹殺できる日が来ようとはな…！」

トウルシギリは叫ぶと共に、部下である戦闘猫を一斉に俺に飛び掛からせる。

「ふん、道場破りに着た拳句、先生に敗れて師を失つた逆恨みとは、底が知れるぞトウルシギリ！」

飛び掛ってきた黒服戦闘猫を冷静にわざきながら回転するように自爆させ続ける俺。

戦闘猫どもは「ヤー！ヤー叫びながらその数を1匹また1匹と減らしていく、ついにはトウルシギリとあと3匹を残すだけとなつた。

「やはり、タダの戦闘猫など相手にならぬか… チョンジーネ・ネ ブローサ…！」

声と共にトウルシギリを灰色の光が包み、現れたのは魚鱗甲に身を包み、口からサーべルタイガーのような牙を生やした姿だった。

「わが牙豹拳で貴様を猫に逢つた鼠のようにならえさせてくれるわーー！」

「なにを…ネコが茶を吹く事を言つてーー！」

交差する俺とトウルシギリ。

俺の打撃は奴に当たつたものの、その堅い魚鱗甲に阻まれてダメージを与えられなかつた。

「そんなものか？では」ちらから行くぞ…喰らえ、雲豹流一太刀の剣！」

トウルシギリはその首を横に傾け、顎を好きだすようにして、俺に切り付けてくる。その斬撃を躊躇し、奴の脇腹に『獅子山拳流レオ・

パンチ』を放つたが奴の魚鱗甲にまたしても防がれる。

「バン、危険です離れてください！」

頭の中で、マリーヌの警告が鳴り響く。

「甘いわ！」

突き出した顎を引き、一本のとがった牙を俺に突き立てるトルシギリ。俺は危うく避けたものの、奴の牙でかなりアーマーを損傷してしまった。

奴の攻撃力の凄まじさに、慌てて距離を取ろうとする俺。しかし、トルシギリは俺を逃がすまいと首をぶんぶんと振り回し、逃げる俺のアーマーを着実に削っていく。

「バン、一度逃げましょ！」

マリーヌの叫びが聞こえるが、奴の剣陣は広く、逃げ切る事は出来そうもない。

「ふはははは！ 最強の牙に耐打撃最強の鎧！ イエネコ程度の攻撃など通じんよ！ ！」

奴の言うとおり、俺の攻撃は一切奴に通じていない。  
このままでは…死ぬ…！」

『ふむ…バンよ、ではわが跳猫拳を使わせてやる』

辺りに響き渡る凜とした声。

その声と共に、俺の体は茶色の光に包まれ、マリーヌが弾んだ声

でナレーションする。

カラカル・チエンジー mode カラカル！！！

そして光が引くと、俺はカギ爪とマントを持ったエスマイルのアーマーを装備した、美しい茶色のネコ科に変身していた。

「その姿はエスマイル！ そうか、貴様がエスマイルを倒し、その力を奪つたのだな！」

「違う！ エスマイルは俺を武人と認め、その力を俺に託したのだ！」

叫ぶと共に、空高く飛び上がる俺。

そして空中で態勢を立て直し、マントを使って勢いよく地面に降り立つ際に、奴の魚鱗甲をカギ爪で切り裂く。

「おのれ！」

振り回す大牙が俺のマントをかすめて生地が少し散つたが、気にすることなく再び空に舞い上がる。

そして再び『反転した丁字状』に交差する俺とトウルシギリ。何度もその激突を繰り返すうちに、奴の魚鱗甲はすっかり剥げ、俺のマントもズタズタに切り裂かれた。

「…お互い次の一撃で決まるな…」

牙以外のアーマーを解除し、トウルシギリは居合抜きのよじに顎を引いて牙を構える。

俺も、ぼろぼろになつたエスマイルの姿を解き、再びイホネコの姿に戻つた。

両者の間に緊張が走る。

そして、奴に向かつて駆けだす俺。  
飛び込んでくる俺に居合抜きを合わせるべく、首を振るトウルシリ。

しかし、奴がとらえたはずの俺は、直前で地面上にへばりつくように停止しており、奴の巨大な牙の居合切りは空を切つた。

「【獅子山拳流・牡丹雪の構え】…そしてこれが俺を鼠とのたまた貴様へのなむけだ！」

そして俺は首を振つたことでがら空きになつたトウルシリの首筋に突つ込むと、その喉笛をイエネコの牙で噛み切つた。

「窮鼠猫噛むとはこの事だな！…」

「ぐふっ」

喉を抑えて倒れるトウルシリ。

「命までは取らん。貴様がブラックタイガーのアジトを教えるなら…」

負け猫に情けを掛ける俺。

「見事なり…小床木バン…2代に渡つて牙豹拳が破れようとはな

…「…

「牙豹拳は強かつたぞ、トウルシギリ。しかしそれはあくまでも自分を守り、他人を傷つけるだけの強さだった…」

俺の言葉に目を見開くトウルシギリ。

「獅子山拳の極意…それは他者を慈しみ、弱者を守る心の強さだ！」

そう、それはエスマイルと俺に共通する、弱者を守るといつ心に通じる事であり、エスマイルが俺に力を貸す理由ともなった強さである。

「そうか…わが師も我も体ばかり鍛え、心を鍛えてはいなかつたのだな」

そう言つて、喉を抑えたまま立ち上がり、俺の目を見て何かを決心した。

「敗者は勝者に従うも…我はこれより獅子山拳伝承者である貴様に従おう…」

トウルシギリがそう言つた瞬間、奴の腹には大穴があいた。

そしてその傷を呆然と見ると、奴はフラフラとたらを踏み、その場に崩れ落ちるように倒れ込んだのだ。

## 恐怖！黒猫真拳！！

ジャーン…ジャーンジャンジャーン（銅鑼の音）

『 いつの世からの理か、古来より社会の陰で弱者を貪りつづける  
悪の組織…』

『 人の知らぬ闇の中… そんな悪の組織に立ち向かう一匹の猫がいた…』

『 変身ヒーロー獅子拳ジャーーーー！』

チャララ、チャララ、チャララララチャンガッシーンーーー！

あのビル影の奥、届かぬ正義に泣く声に

答える力が巡りくる

倒れたお前に立てるモノは

白き虎毛の小さき体

振るえ右足、力の限り  
すり寄る友が倒れても

ならせ喉音、息する限り  
抱く腕かいなが温まるまで

闇の中の、光るネコ目を見逃すな  
輝けバン！流星の如く！

♪前回のあらすじ　Hスマイルを倒した俺の前に現れ、ヒョコ

を惨殺していったテレーズ！彼女が去った後やつてきたトウルシギリをバンはついに倒した！そして改心したトウルシギリが立ち上がった所、彼の腹に大穴が開いた。そしてトウルシギリはその場に崩れ落ちるようつに倒れ伏したのだ――

「トウルシギリ！大丈夫か！」

俺が倒れたトウルシギリに近寄ると、奴は息も切れ切れで明らかに目の焦点はあっていなかった。傷口はちょうど腹の中央にぽつかりと空いており、そこからは『だくだく』と血が流れ続いている。

「……俺に気を取られるなバン……奴はすでにお前を狙つているぞ……」

瀕死ながらも俺を気にするトウルシギリ。

「奴とは？」

「裁きのムカージー……」

「ムカージーだと！」

俺がそう叫んだ時、俺と1メートルほど離れた路上の空間が突如としてぐにゃりと歪む。

そしてそこには雄雄しき黒豹が此方を冷酷な目で見据えていた。

「裏切り者が……一撃でどごめを刺しておくんじゃつたわい……」

「お前はムカージー！お前……一度は改心し先生に従つていたと

いうのに再び黒虎に従つとはどうづつ事だ！」

「ふつ……前にわしがマクシミリアンに下つたのは年経た事による氣の迷いよ……復活して若返つた時、氣づいたのじや……6将軍として

の誇りになーーー！」

ムカージーがそう言いながら右前足を上げると、何処に隠れていったのか、黒服の戦闘猫がすらりと奴の後ろに整列した。

「出会え、出会えーーー！　トウルシギリもひともやってしまえ

その掛け声を聞き、トウルシギリの部下がわれ先へと逃げ出していく。

「うつむ…再び悪の道に戻ったのみならず、仲間を殺そうとするとは許せんーーー！」

「変身！獅子拳ジヤーーー！」

フェリス・チョンジ！ mode…カトウース！！！

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。  
そして光が引いた後、路上には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野田博士の開発した戦闘A.I.『マリーヌ』と共に  
人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！  
バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて  
バンを覆面ヒーローにすることができるのだ！！！

「犬猫も三日飼えば恩を忘れずと言つ！先生への恩を忘れた貴様に正義の鉄槌を下してやうづ……」

「恩など猫に小判じや一変身…パンテエラ・パルドウス…

ムカージーがそう呴くと共に、ムカージーはその場からふつと姿を焼き消してしまつた。

「逃げたか…ムカージー！」

突つ込んできた戦闘猫を叩きのめしながら俺はトウルシギリを守り続ける。

そんな俺を見て、トウルシギリは苦しそうに苦言を呈した。

「…バン…お前は知らんかもしれんが…ムカージーのアーマーは光学迷彩…奴は姿を消しているのだ…」

「なんだと…そのような力を隠していたのか！」

以前、俺に魂を預けた時には、助言しかくれなかつたムカージー。知将と言われただけはあつて、奥の手を隠し続けていたようだ。

「…ふつわしの黒猫真拳は門外不出の暗殺拳…継承者以外には決して使わせんのよ」

「戦闘員に隠れて奇襲とは門外不出も大したことないな！」

突つ込んできた戦闘猫2匹の頭を小突き合わせるかのようにぶつけ、一度に倒した俺が叫び返す。その時、俺の右わき腹に前触れなく鋭い打撃が直撃するのを感じた。

「くつ・・・」

吹き飛びながらも態勢を整える俺が慌てて元居た場所に戻り、めくらめつまづに連打を放つが、まったく捕えられない。

「面白い踊りよのう、小床木バン…正義のヒーローなど止めて一カスにでも入ってはどうか？」

「ぐわっ！」

奴の話声のした方向に打撃を打ち込み続けたがかすりもせずに、逆に背中を打たれ、アーマーの大部分を削がれてしまった。

「このままでは負ける…」

そう思った俺の目に、戦闘猫に囮まれたトウルシギリの姿が目に映る。

「やめよ、貴様ら…」

慌ててトウルシギリに纏わりついていた戦闘猫を跳ね飛ばし、安全を確保してやる。

「小床木バン…俺の事は放つておけ…」

「何を言つていろ…その傷では戦闘猫一匹さえ相手できぬであるう…」

囮んでいた戦闘猫にネコパンチを繰り出していた俺だが、またも

「…バン…俺はもう死ぬ…その前にお前に…」「やめろートウルシギリ！必ず助かる！…」

やムカージーが奇襲をかけたため、トウルシギリの足元に吹き飛んでしまった。

「ぐつ…

打ち所が悪かったのか、立ち上がりれない…

「もはや…態勢は決したな…」

「もうムカージーが近くで囁くのが聞こえる…  
どうやら、これで終わりらしい。」

そう思つた俺のアーマーが解除され、俺はただのイエネコの姿に戻つてしまつた。

「バン…死ぬな…お前はここで死んでいい漢ではない！」

そう、俺の耳元で声がした。

ふと見ると、血だらけのトウルシギリが俺を守るかのように仁王立ちしていた。

「やめろ…トウルシギリ…」

「ふつ…わが牙豹拳は獅子山拳とは違うのだ…」

「獅子山拳は弱者を守る拳だが…牙豹拳は傷つける技…それが…たとえ…自分であつても…」

トウルシギリは唯一纏つっていたアーマーである牙を血の体に突き刺す。

そして、首を振り、傷口を広げると、辺りにトウルシギリの血が飛び散つた。

「なんじやとおおおおおおおおおお

途端に上がる叫び声。

見るとトウルシギリの血を浴びたムカージーがその透明な体に血を付けて、真っ赤な豹の姿を衆目にさらしていた。

「後は…頼んだぞ…バン！」

崩れ落ちるトウルシギリ。

「わかった…お前の覚悟…決して無駄にはせん！」

息を引き取ったトウルシギリの魂が俺の体に宿るのを感じ、涙と共に右手に力が宿るのを感じる。

そしてムカージーに全力で突っ込む俺。

白い体は流星の如く輝き、俺はその力のすべてを使い、獅子山拳師範・俺だけが使える必殺技を奴にぶつけた！

「シューティング・カトウース！！」

流星の如く突っ込む俺の右前足にトウルシギリの大牙が重なる。そして俺の右前足はムカージーの光学迷彩を引き裂き、中に居た奴に大ダメージを与えた！

「ぬぐわああああああああああ

ムカージーは派手に吹っ飛び、城壁にぶつかると、その動きを止めた。

そして、逃げ出す戦闘猫ども。

その姿を確認した俺だが、力を使い果たし、奴にどじめを刺すこともできず、その場に突つ伏している。

「……やつたぞ、トウルシギリ……お前の仇を討つて  
「……果たしてそうかな！」

声に驚き、顔を上げた俺の目に、立ち上がるムカーボーの姿が映つた。

「最強と言われる獅子山拳といえども、使つのがイエネコではわしに致命傷を与える事は出来んかった様じゃのア……」

「・・・・・」

悔しくて臍をかむ俺。

獅子山拳を学んでいる時より、俺がイエネコであることはことあるごとに、俺を悩ます問題だった。イエネコの力はネコ族の中でも1・2を争うほど弱く、力を必要とする獅子山拳の同門の先輩方は他の流派を学ぶように何度も忠告されたものだ。

それを克服すべく、アーマーに使う怒りパワーで自らの体を流星へと変え、敵に超打撃を与える俺だけの必殺技を編み出すことで、先生から師範と認めてもらうことができたのだが…奴を倒すための力には少し足りなかつたらしい…

「まあ、今回は…みのがしてやるうかのう・・・」

そのまま死を覚悟した俺だったが、ムカーボーは意外なことを言つてその場を去つて行こうとした。

「どじめを刺さんのか？」

「わしは知将ぞ？何度も前と戦つても負けんのに、なぜ怪我をし

たこの状態で無理せねばならんのだ？」

昔ながらの笑顔で俺を見るムカージー…  
まさかムカージーは俺を鍛えるために…

ありがとう…ムカージー…そつ奴の後ろ姿に礼を述べる俺。  
そして、俺はそのまま氣を失い、氣づいた時は再び、白髪のツイ  
ンテールの館の中だつた。

「ううやああああああああああああああああ

真つ暗な闇の中にムカージーの叫び声が響き渡つた。

「まつたく…ジジイはこれだから使えないわね」  
しなやかな最速のネコ科はそう言つとムカージーの体に手を置き、  
その魂を切り裂いた体から『つるり』と吸収する。

「うん、なるほど、こう使つのね。なかなかいいじゃない」  
美しい顔に肉食獣の笑みを浮かべながら、テレーズはその場から  
『ふつ』っと姿を消した。

## 恐怖！黒猫真拳！！（後書き）

名前 小床木バン（おとこぎばん）

（おとこぎばん）

【基本職】F・C・A・T・U・S【サブ職業】変身ヒーロー

腕力 イエネコ  
体力 イエネコ  
器用さ イエネコ  
敏捷 イエネコ  
知力 イエネコ  
人並み イエネコ  
精神 師範代  
愛情 ネコ程度  
魅力 薄めの虎柄・白アメシヨ  
生命 馬ぐらい  
運 ヒーロー

## スキル

【獅子山拳・師範】LV.17

【魂の伝承者】LV.3

（C·caracal）  
(N·nebulosa)

【正義の心】LV.10

【人語】LV.11

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8149y/>

---

変身する猫ヒーローだけど異世界来た

2011年11月26日19時54分発行